川崎市立小学校体育研究会

高津支部研究だより

２０２３年　第１号

第１回高津支部授業研究会

１１月１日（水）に上作延小学校にて第１回高津支部授業研究会が行われました。ご多用の中、多くの方々にご参加していただきました。

研究協議では、多くの方から意見や感想をいただき、活発な意見交流ができました。話題になったことや意見・感想をまとめました。

≪６年生　ボール運動　ゴール型「バスケットボール」
～ゴールを目指してたくさんシュートを打とう～≫

授業者　網屋　啓介先生

□教師のねらいと実態

・一人一人がボールに触れる機会を増やしたりシュートをたくさん打つことができたりするように攻撃側が数的優位のルール等の設定。

・子供が主体、「気付き・考え・行動」することができるための道すじ。

・子供が「気付き・考え」を言語化することができるようにするための教師の問いかけや子供が自信をもって自分の考えを伝えることができるような教師の関わり。

・対話的に学ぶためのファシリテートや思考と動きを整理するための教師の関わり。

・子供の必要感に応じながら、課題の解決につながる練習の提示。

研究協議　〇感想や意見　☆質問　◎質問に対する回答

〇どのチームも自分たちの作戦を表現しようとする姿があった。

☆パスをつなごうというめあてを立てて取り組んでいたチームがあった。パスはつながっていたが、なかなか、シュートまではつながらなかった。次の時間に向けて、どういうアプローチ・支援をしていくのか。

◎次回の試合前の話し合いの時に、パスがつながらずにシュートまでいけなかったのか、パスはつながったけどシュートが入らなかったのか問いかけ、チームの課題を解決するためにどんな練習をするとよいのか考えさせたい。

〇子供たちで同士話し合い、前回の振り返りを活かして一人一人役割を考え、次のゲームのめあてを考えることができていた。

☆パスを出した後、ボールを持って止まってしまう姿があった。その後の動きが、まだ意識できていない様子。次回以降、どのように言葉をかけていくのか。

◎パスを出した後の動きについては、直接の指導はしていないが「どこに動けばいいのかな」という言葉かけをしてきた。パスを出した後の動きについて、子供たち自身で考えさせることができるような言葉かけをしていきたい。

〇話し合う際の子供たちへの言葉かけや実際に話し合っている子供たちの姿勢や態度がよかった。
〇チームの中での共通語があるのは自信につながったり思いっきりプレーすることにつながるのではないか。
〇ウォーミングアップで、なぜ３対２を取り入れたのかを子供たちが理解したり、シュートを打つ時に「頭の位置」からと「胸の前」からでは、どちらがよいのかや、ゴールから遠い所と近い所では、どちらが入りやすいのか等、問いかけをしたりすると得点率が上がり、喜びにつながるのではないか。
〇ボールを持つ時間が長かったので、持つ時間を短くする練習もあってもよかったのではないか。
〇チームのめあてを書いたホワイトボードを壁にかけておくと、子供たちも意識しやすいのではないか。
☆学習カードがうまく書けない子供に対しての支援はどのようにしているのか。
☆子供はよく話し合っていて課題もよく分かっていた。さらによくするためには、子供たちだけの引き出しでは難しい。その時に教師が子供たちにどのように支援をしていくのか。ICT の活用も考えられるのではないか。
☆話し合いがよくできていた。子供たちに、どのような指導をしてきたのか。
☆評価に一人一人の意見を尊重するとあるが、どういう姿を想定していたのか。
◎体育の授業だけでなく、国語や教室での授業で話し合い活動をよくやっている。そこでの経験が活かされていたのではないか。
◎自分の意見を通すだけではなく、話し合いの中で中心になる子供がいて、それを一生懸命聞く子供がいて、そこからしっかりとそれぞれが考えることができればよいのではないか。
◎ＩＣＴの活用については考えていなかった。活用の方法は今後考えていきたい。
◎学習カードについては、カードに書く内容を簡単にするよう考えた。
☆小学生のバスケットボールを見てのどのような印象を持ったのか。中学生になるまでに、身に付けさせた方がよい技能は何か。
◎初めは意欲的でなかった子供も単元が進むにつれ、とても意欲的に取り組んでいる姿があった。できたことにフォーカスをあてることを今後もしていきたい。
シュートに行くまでの過程に価値を置いて進めてきた。今回でいうところの作戦の部分にあたる。ゴールを枠内については、指導要領上、中学３年生での指導。
〇人数が多いからこそ、出番を待っている間にＧＩＧＡ端末での撮影やペアチームからのアドバイスも考えられる。振り返りは、上手くいかなかったことに話題が行くこともあるので、教師からの言葉かけにより前向きな話題にしていくことも必要。
〇３対２の数的優位が、子供たちのシュートをねらう意識を生んでいたのではないか。
〇作戦でブロックのことを考えていたチームがあった。
☆常に、勝敗を競う必要があるか等、色々考えはあると思うが、授業者として勝敗を競い合うことについてどのように考えているか。守備のめあてについて想定していたのか。また、それについて支部はどのように考えていたのか。守り方についてはクラスで共有していたのか。
◎勝敗については、負けても受け入れることも学習であると伝えている。守り方については、３時間目にぶつかったら反則と伝えた（確認した）程度。今回のゲームのルールから、守備から速攻するまでの動きが速い方がフリーで打ちやすいようになっている。そこから、子供の思考の中では、守備を頑張って攻めるという考えは想定できる。その時に、何のために守るのかを問うことで攻撃の意識に結び付くことになる。

指導講評　講師　：　上谷　圭　先生（川崎市立小学校体育研究会助言者、川崎市立宮崎台小学校総括教諭）

●大人数でもお互いの話を聞きながらきちんと話し合いができていた。

●目指すことが明確に表れている。

●自分はどんなことを意識して動けばよいのかを考えることができていた。そこから、めあてを立てることができていた。また、仲間の考えを認める姿を見ることができた。

●めあてや作戦を意識できていたがシュートまで上手くいかなかったチームもあった。上手くいかなかったチームはシュートをする意識が低く、パスをすることが目的になっていた場面も見られた。子どもたちは作戦を考えることができていたがシュートにつなげるために教師の手立てが必要だったのではないか。

●子供たち自身の必要感から練習でバウンドパスを出す練習をしていたチームもあったが、ゲームではあまり見られなかったのでゲームにつながるように働きかけが必要であったのではないか。

●授業者は、本時目標をしっかりと意識していた。チームによっては、引き出すだけでなく一緒に考え、教えたり気付かせたり等の支援が必要だったのではないか。また、子供の必要感に合わせて個やチームに応じた関わりだけでなく、学級全体での関わり（課題を共有する時間等）も必要だったのではないか。

●技能については、子供の実態と必要感から。パス・ドリブル、シュートだけではなく、得点しやすい場所に動いたりフリーでボールをもらったりする等のたくさんシュートを打つために身に付けなければいけない動きがあるのではないか。今回は、子供の姿にもよく表れていた。どの技能がゲームに活きるのかを個々でも全体でも共有してもよかったのではないか。バスケットボールに出会ったばかりの子供たちには、シュートの練習をしてもよかったのではないか。

●ゴール型の単元全体を見た時に、どの単元で守備について指導するのかを考えることが大切だが、守備については子供の必要感から出てくる。子供の思考に沿って柔軟に指導できるとよい。

●ゲームに出ていない子供にいかに役割をもたせることができるのか。出ていないからこそできる事がある。ゲーム中に話し合いをしているチームもあった。

支部の研究について

●目指す姿がはっきりすると手立てがはっきりする。手立ての「プラス１」や数的優位等、攻撃側に易しい状況を生むことができていてよかった。プラス１の役割は、シュートを打つだけではない。いろいろな役割があるということを今後考えられたらよいのではないか。コートの大きさや試合に出る人数についても子供が動かざるを得ない状況をつくれていた。運動量にもつながっていたのでよかった。出場時間についても問題なかったのではないか。得点後センターラインから始めることについては、メリットとデメリットがある。メリットは、ゴール前にボールを運びやすく連続してゴールを決められにくい。デメリットは、素早い展開が難しい。実際の子供たちの様子を見るとすぐにボールを真ん中まで運んでいたので、そこの部分については解消されていた。

●必要感のある技能について整理できるとよい。中学年・中学校の系統性を意識してどこまで指導しておかないといけないのかが分かる。全員で共有できないことは指導しすぎないことも大事。

●ゴール型の特性を生かしたカリキュラムマネジメントを考える。

●汎用的な学びの実現について　体育を通して学ぶべきことを意識するとよい。今回の上作延小学校の子どもたちは、国語での学びを生かした姿が見られた。

担当：下作延小学校　山崎　希比古